

B 平安時代中頃には、末法思想の流行も相まって、死後に阿弥陀如来の極楽浄土に往生することを願う浄土教が盛んになった。浄土教は朝廷の貴族たちの間に広まり、地上に浄土を現出させるべく、壮麗な寺院がいくつもつくられた。典型的なものとして が建てた法成寺があるが、その造営にあたっては、多くの受領たちが奉仕を行ったことで知られている。

なお、寺院造営以外にも受領層が上級貴族に奉仕した例はしばしばみられる。例えば、 の邸宅の造営にあたっては、受領を歴任し、当時伊予守であった人物が奉仕したことが知られている。

一方、都だけではなく、都から遠く離れた地方でも阿弥陀如来を本尊とする寺院が建てられていった。代表的な例として、奥州藤原氏が営んだ平泉がある。平泉には、藤原清衡・基衡・秀衡の3代にわたって多くの浄土教寺院が造営され、栄華を誇っていたが、4代泰衡の時期に戦乱によって衰退した。

奥州藤原氏が平泉を拠点に東北地方における支配を確立する過程では、先に挙げた の邸宅造営に奉仕した人物の甥やその子供が大きく関わっていたが、後に平泉を攻めて奥州藤原氏を滅ぼしたのも彼らの子孫にあたる であった。

問 4 下線部④に関連して、平安時代から中世にかけて、ある行為が盛んに行われた。次の史料 2・3 は、1007(寛弘 4)年に、 がその行為を行った際に書いた日記の一部とその行為に用いられたものに記された銘文の一部である(原漢文、一部改変)。これらの史料に基づいて、その行為がどのようなものか説明せよ。

史料 2

(寛弘 4 年 8 月)

二日 金峯山(注 1)に参る。丑の時をもって出立す。

十一日 件の経等(注 2)、宝前(注 3)に金銅の燈楼を建て、その下に埋む。常燈を供するなり。

(『御堂関白記』寛弘 4 年 8 月 2 日条, 11 日条)

史料3

南^{なんせんぶしゅう}瞻部洲大日本国(注4)左大臣正二位 , 百日潔齋し, 信心の道俗若干人を率いて, 寛弘四年秋八月をもって金峯山に上り, 手ずから自ら書写し奉る妙法蓮華經一部八卷, (中略)般若心經一卷, 合わせて十五卷, これを銅^{どうきょう}篋(注5)に納め, 金峯に埋む。(後略)

弟子 (注6)敬白
(金峯山出土金銅製容器銘文)

- 注1 「金峯山」とは, 現在の奈良県南部にある山。
注2 「件の經等」とは, 自ら書写した法華經・般若心經等を指す。
注3 「宝前」とは, 本堂の前のこと。
注4 「南瞻部洲大日本国」とは, 仏教用語で日本のことを指す。
注5 「銅篋」とは銘文の書かれた当該の金銅製容器のこと。
注6 史料中の は, 表記は異なるが同一人物を指す。

問5 下線部⑤に関連して, 彼らはなぜ のような貴族に対して奉仕を行ったのか, の名を明示しながら受領の地位獲得の面から説明せよ。また, 当時は, 受領が任期終了後, 次の地位を獲得するためには, ある正式な手続が必要であった。何が必要であったのか, 説明せよ。

問6 下線部⑥に関連して, 奥州藤原氏が滅亡するに至る経緯と, それに関わって, が獲得した支配権について, の名, および奥州藤原氏滅亡直前に平泉に滞在していた の弟の名を挙げて説明せよ。